

Rotary International District 2800

山形西ロータリークラブ会報

会長：市村 清勝 幹事：安部 弘行



イマジン ロータリー

地区目標 ロータリーに夢をもって行動しましょう!!

クラブテーマ 想像から行動へ～優しさ溢れる出会い (DEI) のクラブ～

- ◆点鐘：市村 清勝 会長
- ◆ロータリーソング：我等の生業
- ◆司会：平田 智則 S.A.A.
- ◆会場：山形グランドホテル



令和5年 2月18日(土)

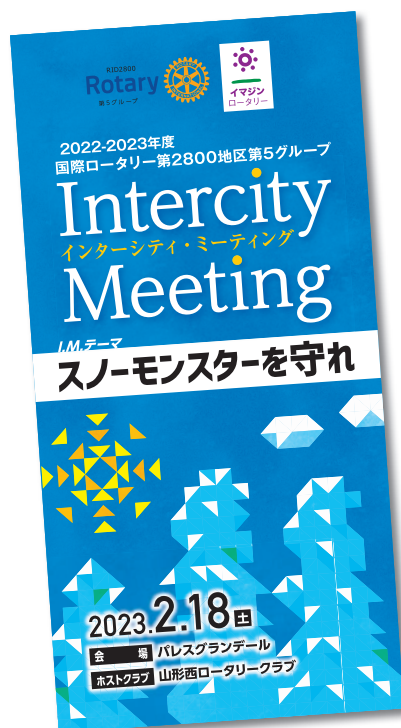
2022-2023年度
国際ロータリー第2800地区第5グループ

Intercity Meeting

インターシティ・ミーティング

I.M.テーマ

スノーマンスターを守れ



佐藤 孝弘
山形市長



後藤 卓也
ガバナー補佐



後藤 憲一
ガバナー補佐



鈴木 浩司
I.M.実行委員長

歓迎のことば

市村 清勝 会長



山形西ロータリークラブの会長を務めております市村でございます。クラブを代表して、ひとこと歓迎のご挨拶をさせていただきますと思います。

国際ロータリー第2800地区第5グループのインターシティミーティング開催にあたり、佐藤孝子ガバナーをはじめ、第5グループ10クラブの多くの皆さまにご参加を賜りまして、誠にありがとうございます。今日の日を迎えることができましたことに、喜びと幾ばくかの安堵の気持ちを感じているところであります。

本日のIMのテーマ、「スノーモンスターを守れ」とさせていただきます。今年度よりRIではこれまで6つだった重点分野を7つにし、「環境」という新たなカテゴリーを追加いたしました。今、山形にとって最も重要な観光資源の1つ、蔵王の樹氷、通称「スノーモンスター」が重大な危機に瀕しております。スノーモンスターができるために必要なアオモリトドマツの立ち枯れ。それと地球環境は深くかかわっているようであります。今日は、樹氷研究の第一人者であります、山形大学名誉教授、柳澤文孝先生をお迎えして基調講演をいただき、話をお聞きしたのちに、パネルディスカッションでいろんな立場での樹氷に対するそれぞれの思いを語っていただきます。皆さまにはそのお話の中から何かを感じ取っていただきたいなと思っております。

スノーモンスタの未来を想像していただければと思います。まさしくRIのテーマであります「イマジニロータリー」であります。近隣クラブが共通のテーマで語り合い、知己の輪を広げる。フォーラムと懇親会をセットにするというIM本来の形を大切に、ご参加いただいた10クラブの皆さまの今後のロータリー活動に利用していただき、イマジンの連鎖と活動の輪ができる。そんなIMであってほしいなと心から思っているところであります。

最後に、本日のIMは当クラブの実行委員会のメンバーが心を込めて準備をさせていただきました。まだまだコロナの影響も多い中であります。不行き届きの点もあろうかと思いますが、ロータリアンの友情に免じてご容赦をいただきたいと存じております。皆さまにとって今日のこの1日が有意義な時間となることを心からお祈り申し上げまして、歓迎のご挨拶とさせていただきます。今日はありがとうございます。

ガバナー挨拶

佐藤 孝子 ガバナー



本日は山形西ロータリークラブの皆さまがホストクラブとなりまして、このように盛大に開催できましたことを本当に心より喜び申し上げます。

IMは、近隣のクラブの皆さまが、同じテーマで皆さまと一緒に話し合ったり意見交換をしたり、皆さまにとって共通の話題で研修をするというほんとにすばらしい企画だと思います。さらに、このあと懇親ということで友情の輪を広げるという、IMでなくてはできない研修の場だと思います。

今日のIMのテーマ「スノーモンスターを守れ」。山形の蔵王での本当にシンボルであります樹氷につきまして、参加の皆さまと一緒に研修をできる機会をいただきまして本当にうれしく思っております。この貴重な時間を皆さまと一緒に有意義にすばらしいIMになることをご祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

基調講演

樹氷の危機的状況と今後について

柳澤 文孝 さん

〔山形大学名誉教授〕



1. 「樹氷」とは

「樹氷」には、過冷却水滴のみからなる「エビノシippo」と、過冷却水滴と雪が一体化して氷の塊となった「ホワイトモンスター」「スノーモンスター」「アイスモンスター（学術用語）」の二種類があります。「エビノシippo」は世界中にありますが、「スノーモンスター」は日本のみで見られる極めて貴重な自然現象です。

2. 「スノーモンスター」の歴史

大正3年2月15日、山形師範学校の神山教諭らによる蔵王冬季初登頂で発見され、「雪の坊」「雪娘」「雪こぶ」とよばれました。大正10年1月5日、慶応大学山岳部の蔵王冬季初踏破で初めて写真が撮られ、写真と手記が部報の「登高行」に掲載されて「樹氷」とよばれるようになりました。明治時代から「樹氷」といわれていた「エビノシippo」が樹木を覆ったと誤解したためです。昭和5年頃までには日本各地で発見されています。昭和6年には鉄道省の「陸奥曲」で海外に紹介されました。

蔵王の「スノーモンスター」は、昭和8年の日本山岳会冬季写真展で注目を集め、昭和10年の今泉正路監督「白魔は招く（昭和11年、塚本閔治監督がMt.Zaoとして英語化）」や昭和11年の円谷英二監督（ファンク撮影隊）「日本スキー発達史（未公開）」で全国的に有名となり、昭和25年の新日本観光地百選で1位となってその地位を固めました。

3. 「スノーモンスター」のでき方

シベリアから吹いてくる北西季節風が対馬暖流から水を供給されます。季節風は前山（朝日岳～月山）に衝突して急上昇することで雪雲となり、雪雲の最上部に過冷却水滴帯ができます。過冷却水滴は強風（風速10～15m・零下10～15度）によって後山（蔵王）に飛来し、雪雲に覆われている針葉樹（オモリトドマツ）に衝突して「エビノシippo」ができます。「エビノシippo」と雪が一体化して氷の大きな塊の「スノーモンスター」となります。

4. 「スノーモンスター」から分かる地球環境の変化

アジア大陸からの越境汚染によって1990年頃から黒く酸性化した「スノーモンスター」ができるようになりました。最近では、春季に、シベリアの森林火災・沿海周辺の野焼・黄砂の影響が増えています。かつては北海道から長野県まで見られましたが、温暖化によって、現在では八甲田・八幡平・森吉・蔵王・西吾妻のみです。蔵王の場合、生成下限高度・生成期間は、1940年頃の1400m・12月～3月から、2010年頃の1600m・1月～2月となり、樹氷丈の縮小やスリム化が起っています。温暖化による山地への降雪量の増加やJAPOWも「スノーモンスター」の成長に影響を与えます。このまま気温上昇が続くと今世紀末には全国で「スノーモンスター」ができなくなる可能性があります。

蔵王では、ここ5～6年、蛾の幼虫やキクイムシによる虫害が発生しており、1600m以上にあるアオモリトドマツは葉や枝を失って立ち枯れた状態になっています。苗木の植林などが考えられていますが成木になるには50年はかかります。

「スノーモンスター」を後世まで受け継いでいけるのか、今が正念場です。

パネルディスカッション



パネラー

山形市長 佐藤孝弘様

林野庁東北森林管理局山形森林管理署 益田健太署長

山形新聞社取締役編集局長 峯田益宏様

深山荘高見屋 16代目女将 蔵王温泉女性会 岡崎純子会長

アドバイザー／山形大学名誉教授 柳澤文孝様

総評／柳澤名誉教授

この前テレビを見ておりましたら、「樹氷まつりの準備をしております」という映像とともに、ホースで木に一生懸命水をかけて、つららを作っているという場面が出ておりました。つららを見ながら樹氷まつり、西のほうの話でしたけど、このように樹氷と言いましても地域によって、人によって定義がまったく違います。ですから、まず最初にどういうものが樹氷ですよということを、あるいはアイスモンスターですよということを定義した上で話をさせていただくというのが恒例になっております。

山形の方でも樹氷ってどういうものなのか、どういうふうに珍しいのかということはなかなか分かっていただけない方も多いのではないかなと。いろんなところにお話をさせていただきましたが、なかなか「樹氷ってなに？」とか「なんで珍しいの？」とか、この前も記者会見をやったあとに鳥取からメールが来まして、「うちにも樹氷はあるよ」と言われましたが、全国的にはそういうような認識と言いますかね、「蔵王に樹氷があるのは分かるけど、うちのものとどう違うの？」という、そういうような認識というものがまだ十分に浸透していないところかなと。

ですから、蔵王というものがすぐそばにあるわけですから、こういうところでできれば若い方、小学校とか中学校で遠足でぜひ蔵王に行ってください現状を見れば、現在の状態を見ると環境問題がどう重要なのかというのは多分一目瞭然ということになるんだろうと思います。まずは身近にある、実際に子どもたちからそういうものを認識していただく。そして樹氷がどうしてできるか、どういうふうに重要なのか、環境問題にどういうふうにつながっているのかなというそういうところからまず始めていくというのがいいのではないかなと思います。

ここにいらっしゃる方々のお子さま、あるいはお孫さんに、「こんなことになってたよ」ということをまずは伝えていたき、そして「蔵王に行ってみようよ」というようなところから始めるのがいいのかなと、あまりまとめに話せませんが、そんなことを今日皆さんの話を伺って感じたところでございます。

I M宣言2023 細谷 伸夫 I M研修リーダー



今回のI Mは樹氷の持つ意味、樹氷が存在する意味を考えてみようということでI Mを開催させていただきました。おかげさまで充実したインターシティミーティングが開催されたと思います。市長からは蔵王のイベントのご案内をいただきましたし、また「樹氷復活県民会議」というものが立ち上がるということで、かなり期待できるなということで安心しているところでございます。

益田さんからは、なかなかアオモリトドマツのノウハウがないんだということで、走りながら活動するというご苦労をいただきました。峯田さんからは子どもたちを育てようということで、子どもたちを主体とした「みどりのまなび 樹氷再生への歩み」プロジェクトという夏の教室ということをお話いただきました。それから岡崎さんには観光資源としての世界の旅籠を守るという悲痛に近いようなお話もいただきました。

皆さんからの解決策なりを総括いたしまして、やはりまずは皆さんからの発信の必要性和知っていただくこと、現場を見ようという、現場主義というものが大切であろうというふうにお話をうかがっております。皆さま方、今日はロータリアンとして何かをここから感じ取っていただけたものと思っております。

今日は基調講演、そしてパネルディスカッションでアオモリトドマツの林の惨状、どうしようもない、支援しなきゃいけないんじゃないかというものの、それからその対策の困難性、かなり難しいなというところの困難性も理解させていただきました。そしてその問題は、単にアオモリトドマツの話だけじゃなくて、世界の自然環境をめぐる破壊の問題、温暖化の問題、観光も含めた経済的な問題、社会的な問題、そして政治絡みの問題。なにかと深い関係があるんだということを理解させていただいたわけであります。

我々はここで大きな課題を与えられました。そしてその課題解決のためには我々は今何をすべきなのか、どう考え対応していくのかということをしなければいけない。これは大切であろうということを感じかせていただいたわけであります。

ロータリーは、事業主の方々の集まりでしたのでそれではまず自らを正そうじゃないかということが中心となって活動を始めておりました。職業奉仕ということになると思うのですが、この職業奉仕というものの、実は社会を良くする運動、活動の1つの主体にすぎないわけであります。ロータリーの根源というのが、人々が人間らしく生きる社会をつくるという、その活動であろうというふうに思っております。今日のI Mのテーマと軌を一にするものでありと思っております。

1904年頃、金融王であったモルガンという人がクラブについてこう言っております。「クラブは純粋な人間の交流の場である」と。「クラブにとって社会的、文化的役割というのは非常に重要である」ということを、この当時おっしゃっております。まさに今日やりましたI Mの目的と同じであろうと思っております。

今日の研修を踏まえまして、I M宣言というものをまとめてみました。「スノーモンスターを守れ。樹氷は私たちにとってかけがえのないものです。その樹氷が今、消滅の危機に瀕しています。その状況を目の当たりにして何らかの行動が必要です。私たち一人ひとりができることを考えましょう。そして行動しましょう」。こういう宣言であります。いかがだったでしょうか。これをめざして我々活動していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

